海外学生派遣事業　終了報告書

氏名：石橋 嘉一
所属：総合研究大学院大学 文化科学研究科 メディア社会文化専攻
派遣先国名：イギリス
派遣先研究機関：Institute of Education, University of London
（ロンドン大学 教育学研究所）
派遣期間：2007 年 7 月 19 日～2007 年 9 月 5 日
報告年月日：2007 年 10 月 5 日

派遣先研究機関について

“Over 100 years of excellence”というフレーズの通り、派遣先であった Institute of Education, University of London（ロンドン大学 教育学研究所）は、教育学において世界トップレベルの研究機関である。1902 年に高い品質の教員養成を目的に設立され、毎年 1000 人の postgraduate の学生を受け入れている。今回は、私の指導主任教員である青木久美子先生のお知り合いである遠隔教育の権威 Anita Pincas 先生が、私の受け入れ許可して下さり研究留学が可能となった。

また、Institute 付属の図書館には、約 30 万冊の充実した教育学関連の図書が蔵書されており、約 2000 種の学術雑誌をも持ち合わせている。在籍している博士課程の学生においては、高度な理論研究及び実践研究が行われている。

Institute of Education

Library

海外派遣の目的

私の博士論文では、Council of Europe で開発された言語学習法を日本の教育にどう応用し導入することができるかということを研究課題としている。その関係で、研究の初期段階においては、Council of Europe で開発された言語教育法が、どのようにヨーロッパ各国

で利用されているのか、そのケース・スタディを収集する必要があった。そのため、教育学、取り分け言語教育の分野で充実した研究機関・付属図書館を有する Institute of Education を研究基盤に選んだ次第である。

海外派遣前の準備

時系列で以下に記述する。

１．受け入れ先研究機関の指導教員と連絡を取る。Acceptance Letter を執筆してもらい総研大に提出する。

２．研究機関中の滞在先を探す。ロンドン大学付属の residence と自分の希望研究滞在期間との調整をし、部屋の予約確定、保証金の入金等、研究滞在の基盤整備を行う。

３．研究滞在中に開催される国際会議への参加手続き、入金等を前もって行う。

４．大まかな研究計画予定を立てる。

５．フライトを確定し、航空券の前払いを行う。

６．ロンドン大の residence へチェックイン日時の連絡を行う。

７．滞在中に必要な研究資料、衣食住に関わる日需品を揃え、渡航に備える。

特記として、滞在先の決定までには、相当の連絡のやり取りを必要とするので、早めの準備を必要とする。

海外派遣の費用

2007 年 7 月～9 月の派遣期間の大部分において、1 ポンド＝250 円以上のポンド高の影響で滞在費が嵩んだ。residence（寮）の費用は約 28 万円、国際会議への参加費（約 4 万円)、residence から Institute への地下鉄・バスの定期券（約 3 万円)、空港への交通費等を必要とする。

また、生活費・食費については節約生活を心がけても物価高の影響で 13 万円程かかったと記憶している。

海外派遣中の研究

今回の派遣の主な目的は、文献調査と先行研究の情報収集であった。そのため主な研究は、Institute の付属図書館で行った。文献を読み、必要な箇所は順次 PC に入力し、博士論文の前半に使用できるよう Word データとして研究履歴を残していった。具体的には、ヨーロッパ（Council of Europe）が目指す言語教育の哲学はどういったものなのか、その目的を達成するためにどのような言語政策・教育がなされているのか、その具体的な実践例としてどのような教育機関でどのような教授法が行われているか、といった点である。

またロンドン大学の博士課程在籍の学生ともコンタクトを取り、イギリスでのカリキュラムの国際化や言語教育の現状等について話を伺う機会を得るようにした。その他、Oxford 大学の博士課程在籍の学生からも話を伺う機会を得て、それぞれの博士課程研究の進捗状況、日英の教育システムの相違等について議論ができ、大変刺激を受けた。

派遣中に参加した国際会議
Learning Together: Reshaping higher education in a global age

海外派遣中の困難

基本的な英語力は持ち合わせていたために、コミュニケーション上で大きな困難はなかった。しかしながら、ロンドンの物価高を受け、厳しい節約・倹約生活を強いられた。具体的には、1 ポンド=250 円だったために、サンドイッチ 1 つ約 700 円、オレンジジュース 1 本約 400 円、ハンバーガーセット 1 つ約 1000 円等、健康維持の基本となる食事において、切り詰めないといけない経済状況となり大変な気苦労とストレスを感じた。自炊を中心に頑張ってみたものの、それでも食費においてはいつも悩みの種であり、満足のいく食事には量、質ともに得られる生活環境ではなかった。

また residence（寮）での生活においては、夜遅くまで隣人の話し声や歌声が聞こえる時もあり、寝付けない時もあった。

以上、主な困難点を報告したが、困難よりも得たものの方が大きかったことは誤解のないよう最後に明記しておきたい。

Institute での昼食
イギリスで有名な Fish & Chips

同研究機関で研究する後輩へのアドバイス

1．研究について：イギリスの博士課程は、良くも悪くも、放任主義、自主性重視、という印象を受けた。日本でもあたりまえのことかもしれないが、自分から積極的に研究に必要な情報を得ようと努力しなければならない。
2．派遣準備について：受け入れ先の教員や関係機関からメールの返信が来なければ、何度も返信を促すメールを送り、場合によれば直接電話で連絡を取る必要がある。根気がいる作業である。
3．予想外の出費に備えて：residence（寮）の滞在費とは別に deposit（一時預かり金）を請求される。これは全く予想していなかった。約 18 万円を自分で支払った。また返金されるのは、滞在後となり、その時点で為替レートが変わっている場合があることを念頭に入れておいてほしい。具体的には、渡航前に 1 ポンド 250 円で 18 万円の預かり金を自分で支払ったとしても、9 月の返金時に 1 ポンド 230 円前後であれば、戻ってくる金額は約 15 万円程である。そのような予想外の出費があることは、後輩にぜひ伝えておきたい。
3．現地での生活について：ロンドンでは、定期券の期限が切れていないのに改札が通れない、レジで値札と違う金額を要求される、生活をしていくためには無理を承知で交渉に臨まなければならない等、日本では遭遇しない「対決するコミュニケーション」を求められる場合が少なくない。そのような場合は、引き下がってはならない。自身の目的を達成するために、不完全な英語でも自己主張をし、必要に応じて自分の権利を擁護し、相手の責任や矛盾点の追及をしていかなければならない。日本で美徳とされる「遠慮」、「沈黙」、「以心伝心的な相手への期待」は命取りになる。生活の安定は、研究環境の基盤構築である。落ち着いた研究生活環境を手に入れるために、派遣前の事前準備、派遣中の受け入れ先研究機関、滞在先等との入念な打ち合わせ、調整をする準備が必要だと実感している。私は今回それを達成できていたために、現地で大きな問題に遭うことなく研究生活を送れた。しかしながら、詰めが甘く、現地で大きな問題を抱えながら留学生活を送らなければならない日本人学生を少なからず見かけた。後輩においては、ぜひともこの点に配慮して派遣準備を整えていってほしい。